

学会ニュース

日本女性学会

第3号 1980年8月

総会と公開シンポジウムの報告

昨年発足した日本女性学会の第1回総会と公開シンポジウムが、55年6月1日法政大学62年館211番教室で開催された。

総会は午前10時より、30名近い出席者で、司会は野口栄子。開会の挨拶（藤枝滯子）では、「アメリカに発生したWomen's Studiesは、フェミニズムから出発していることを忘れてはならない。元来女性学の問題はアカデミズムに閉じこもらず、実践的であることが重要である。6月9日NHKテレビ放映予定の戦争と女性（正確な題名は不明）は、昨年BBCが作成したものであるが、今年2月カーター大統領が女性の徴兵について述べたことにたいする論議の一環である。フェミニストたちは徴兵制に反対したが、実現すれば参加するともいわれる。その投げかける問題は大きく、本当に考えるべきである。」と話題が提供された。

次いで経過報告・会計報告（松原純子）がおこなわれ、会計監査報告（池上千寿子、小林富久子）があった。会計報告はニュース第2号参照。

引き続き規約（同じくニュース第2号参照）について、起草者（米田佐代子ら）より提案、説明ののち審議に入った。論議の中心となったのは、第2条「本会は人間解放の視点から女性学の確立をめざし、そのための研究および情報交換を行なうことを目的とする」とある「人間解放の視点」ということをめぐるもので、多くの意見が活発にたたかわされた。概括すれば、「人間解放」では論点が曖昧になるから「女性解放」と限定する方がよいという修正意見と、女性だけの解放をみざすものと誤解されるのは困る、女性差別の問題だけでなくエコロジカルな観点など人間解放につながる視点こそ大切という積極的な原案支持意見とに分かれた。女性学会の本質に関わる重要な点であるので、即決をさし控え、2条に関しては来年度総会まで継続審議とすることとし、その他の規約を原案通り可決した。これによって日本女性学会は正式に発足したのである。

役員を選出については次項を参照されたい。また55年度予算についても総会席上で承認された。

総会で承認された役員と、その後幹事会が互選した代表幹事、常任幹事の氏名は次の通りです。

代表幹事	駒 尺 喜 美	藤 枝 滯 子	
幹 事	渥 美 育 子	天 野 寛 子	○漆 田 和 代
	菊 地 京 子	北 沢 杏 子	キャサリン・プロデリック
	小 林 富 久 子	駒 尺 喜 美	○白 井 堯 子
	○杉 山 秀 子	千 葉 康 則	○野 口 栄 子
	福 井 浅 子	藤 枝 滯 子	富士谷 あつ子
	○松 原 純 子	水 田 宗 子	安 田 富 貴 子
	○米 田 佐 代 子		(○印は常任幹事)
会計監査	池 上 千 寿 子	三 木 草 子	

第1回公開シンポジウム報告

55・6・1

午前の総会にひきつづいて、法政大学62年館211番教室で、日本女性学会第1回公開シンポジウムが「女性学の出発」というテーマで開催された。司会は米田佐代子・池上千寿子で、参加者は百数十名もの盛況で、女性学にたいする一般の関心の深さを感じさせられた。

まず報告者の報告内容を順番に紹介したい。

① 駒尺喜美：私にとっての女性学

これから皆でつくっていく女性学は、女の階級意識に立ったイデオロギーのある女性学で、女がやる女性学でなければいけないと思う。女だからいつも女として考えているかという点、決してそうではなく、バツと異和感のようなものを意識して、その瞬間に女として納得できないと思い、そのことをつきつめていく。私の場合そこからでてくるものがイデオロギーの基礎になっている。私は日本の近代文学を専攻しているので、例えば太宰治の書いたもののなかには、枕カバーは装飾だということがある。洗濯をしない男性にとっては、枕カバーは実用ではなく装飾なのだ。そのことをおかしいと思うことから女性学のイデオロギーが確立する。女工哀史と一方でいいながら、工場へ働きにいけば食べられるからよいという考え方が出てくる。あの華やかに見える楊貴妃も纏足されていた。このような二面性は、イデオロギーを明確にしない限り解決しないし、第一にみえて来ないものがある。女性学はマルクス主義に代るイデオロギーだと思う。「第二の性」みたいに女性の側から卑下しているような感じでない「第二のマルクス主義」である。それは性差別原論につながる。女性学は原理的に抑圧の体系を内蔵しているから、その構造を原理的に分類すると、性差別のほうはマルクス主義より見事な体系をつくりだしている。現代でもモラルや愛情はすべて殿様と家来のような——もっと巧妙な性差別の上に成立しているので、私はこのダブルスタンダードを掴み、皆と共に考えていきたい。

② 松原純子：日常性の中の女性学

疫学という自然科学系の学問を専攻している立場から、女性学の問題を考えると、20世紀後半の科学は世界全体の動きとして産業・公害の問題意識などから人間解放を目ざしている。それは男性もふくめた人間として女性を尊重することに関連する。人間社会・健康・育児など

日常生活と密着しており、女性論の根元は日常性にあるともいえる。もちろん男女には解剖学的な区別や人間としての性差は存在する。しかし女性の意志や能力によることなく、たんなる身体的差異を根拠に差別がおこなわれるところに大きな問題がある。女性が仕事をもつと家事の手ぬきが許されないという状況は現在でもつづいており、私は4年前に毎日新聞紙上で女性の生命生産労働と職業的労働は矛盾しないという発言をした時には非常な勇気が必要であった。男性は現実の既得権の上に立って、それらの問題に目をつぶっていることが多い。

女性が生命を生む存在として主体性を求めて立ち上っている現在、学際的性格のつよい未来学としての女性学が望ましい。疫学では医学や統計学・病理学・公害学などの学際的研究がおこなわれている。その場合a+b+cの総和でなく、疫学者には多元的発想のできる疫学的精神が要求され、たんなる分野の相異でなくとりくむ人間の質自体が問題になる。学問は人につくというが、そういう人々の集りによる学際的研究が、女性学の上でも確立される必要がある。

③ 藤枝滯子：第三世界と女性

アジア問題を専攻し、普通の人に比べればアジア諸国（第三世界）を実践的に歩いているので、経験的に問題を考えているといえるかもしれない。今日は第三世界のことだけでなく、アメリカにおける女性学にも言及するようにと司会者からの要求があった。アメリカの女性学について報告する予定の渥美育子さんが病気のため不参加なので、それをカバーする意味で要求があったと思う。

1975年の国際婦人年メキシコ会議には、私は出席できなかったが、高度社会と第三世界が激論した。資本主義国家の人たちは平等論から迫るが、第三世界の人たちは飢えや貧困、文盲、栄養不良などの問題を押し出した。現在の女性学は、地球的発想で考えることが大切で、第三世界の問題をぬきにしては、女性全体は解放されないとさえいえる。自分の住んでいる世界や自分の眼だけの価値観では見にくいものが山積しているのである。

アメリカでは70年代になってWomen's Study がさかんになり、大学で取上げているところ。講座、担当教員などの数は急速に3倍

第2回研究報告会のお知らせ

報告者 藤枝 滯子 (京都精華大学)
テーマ NGO フォーラム(コペンハーゲン)のWomen's Studies
International Seminar に出席して
日時 9月27日(土) 午後2時～5時
場所 東京都教育会館
地下鉄 東西線 神楽坂駅(神楽口)下車徒歩2分 赤城神社隣り
会費 500円

藤枝さんはこのセミナーの運営委員会への参加を要請され、日本の女性学の現況についても報告をして来られました。セミナーは ①性差別を含まない教材の開発、②女性に関する知識の総体をふやすこと、③女性の問題をカリキュラムに入れて行くこと、④女性学と公共政策、の4つのトピックスをめぐって行なわれた模様です。

入会について

日本女性学会では、会員の入会をひろくよびかけています。各分野で孤独な頑張りを続けながら、それを女性学として理論化したり具体的に考えていくことに関心をお持ちの方々や、これまで小さい仲間づくりを進めてきた方々の御参加をお待ちしています。

正式に学会として発足した現在、会の性格も自ずと明らかになってきましたので、設立準備段階で漠然と想定していた会員資格についても、幹事会で再度検討いたしました。そして、学会規約を承認し、所定の会費を払う意志を持つ人なら、どなたでも入会していただくということになりました。会則もなく活動らしい活動もなかった設立総会以前の段階では、ずいぶん見間違いなお申し込みもあり、形式的・事務的な承認ばかりではすまなかったのですが、今後はその心配もなくなったと判断したためです。なお、自分の関心をもつ研究テーマを提示していただくことは、従来と変わりません。

申込み

下記のものを事務局宛に送付する(50円切手と返信用封筒同封のこと)。

○住所・氏名・略歴 ○自分の行なっている研究または仕事のテーマ(女性学と関連させて)*

事務局で受理した後、常任幹事会の承認を待って、学会規約と振替用紙をお送りいたしますので、会費はそれから振り込んでください。幹

事は2月に1度程度しか開かれませんが、御連絡に多少手間どることがあります。

年会費

一般会員 4,000円

賛助会員 個人 一口 30,000円

法人 一口 50,000円

事務局

編集後記

◇涼しい夏でしたが、やはり暑くて困る日もあり、皆さまお元気でしょうか。総会のあと一番忙しい一学期の終り。夏休になってからは、休み中でないといけない仕事に追われ、総会の司会と記録をした責任を果たすこのニュースの原稿がおくれ、ごめいわくをかけました。おわびいたします。(野口栄子)

◇メキシコよりコペン会議の方が身近かに感じられた方も多はず。この5年の見えない変化は次の5年の見える変化を約束するものよう。女性学徒も張り切らなくちゃ、とつぶやきながら、ニュース3号の編集を終ります。

(漆田和代)

*○紹介者名(もしあれば)

になった。しかしこれも大学などが進んで門戸を解放したのではなく、それなりの経緯があったわけで、従ってスタッフも専任教員より非常勤が多い。州によっては教育予算の削減があると、女性学講座も影響を受けているところがある。

④ 千葉康則：人間学と女性学

脳生理学の立場から人間科学の提唱をしているので、女性学についてもそこから考えを進めたい。大阪大学や和光大学で人間科学部が開設されたが、あるべき人間学とあるがままの人間学が明確に区別されないと問題が判然としない。

元来人間というものは存在せず、男女、大人、子供などがあるだけだから、女性研究が人間研究に繋るのでなければ意味がない。男性学の必要性はまだ論じられていないようである。その際に男女がそこにいるのでなく、男性と女性に関り合っているSystem of Dynamicsが問題なので、流動的に変化する状態が大切なのである。人間全体か男か女かと分けて考えて足すのはよくない。女性が変われば男性も（仕方なくかもしれないが）変わる。人間全体が変わりつつある。午前の総会で女性解放について論じられていたが、今や女性だけの問題は存在せず、人間全体が問題になると思う。しかし人間学者や人間学会という用語が成立せず、人間学ということも漠然としているので、女性学も女性科学として考える方向が望ましいと思う。いつも抑圧されていると思っている人といっしょに暮してもおもしろくない。何とか実現したいという意欲が現実をどのように変えるか——それらのことを学会として存在させることには意義が深いと思う。

一般に心理学とは心理学者がやっている学問だといわれることがある。これは余りよい意味ではないので、同様に女性学とは女性学者がやっている学問という定義が出てこない方がよいと思う。

以上のような報告のあと討議に入った。報告者のうち渥美育子さん「アメリカにおける女性学の到達点」は、急病のためおこなわれず、藤枝さんが一部カバーされた。

討議を要約すると次の通りである。

① 女性の生命生産労働を考えると、家族制度との関係やその不可能な人はどうなるか（青木）——自分自身の健康維持もふくめた広い意味で、生めない人も自分や周囲の生命を育む、女性がやったためさげすまれてきた生命生産労働の再評価が必要である（松原）。分業そのものが諸悪の根源だと思う（駒尺）。

② とりあえず女性学に第三世界の問題も含めてタイムスケジュールをもっているか（二見）。

——100年は動かないと思っていた。しかし20年前にこのようなことを言っても誰もきいてくれなかったが、1万人の中の1人がきいてくれるのがこのところ5年である（駒尺）。1975年の世界婦人年メキシコ宣言から現実的にはめざましい進展がある。タイムスケジュールは示せといわれても、それにたいしてどのような努力を払うかが問われなければ仕方がないので、実際には気が遠くなるような話である（藤枝）。科学的には永遠に不明である。しかし教育や現実問題で女性が変われば社会が変わる。男性は疲れはてて3、4年で何かのめやすが出るかもしれない。研究全体としては永久に残り続けるだろう（千葉）。インテリ、知識人の一部には思想として公認されるのは20年か30年あとのことであろう（駒尺）。

③ 性差・能力は純粋に環境によってできたものかまたは生得的なものか。——科学的に性差を検討することは困難である。従来男性に比べて女性が劣っているといわれてきたことは、根拠がない。また女性が本気でチャレンジした結果が問題にならなければいけないが、なかなかデータが集らない。男性は子供を生むことだけはチャレンジしても駄目だということは明白である（千葉）。社会的に抑圧されながら、これだけ成果をあげているのは女性が優秀だからではないか（駒尺）。チャレンジしたくてもその場が与えられないので、精神的抑圧がある（三木）。

④ 藤枝先生へ第三世界の女性の抑圧・差別について（横山）。——さきほど抽象的な話しかしなかったが、欧米ではフェミニズム運動が産業革命以後の問題だが、第三世界では植民地化の中での民族的課題だった。農業中心で、NHKの調査でも男は仕事、女は家庭という考え方がたてまえとして出てくる。しかし2年毎ぐらいに行ってみると大都市での変化はめざましい。フィリピンでは以前は母系社会で、南半分はイスラム、タイでは女性の解放はまだでてこない。高い教育の富裕層は全女性の1%で、あとはヒンズーの伝統的体制内でさまざまの抑圧を受けている。おくられているという眼でみるだけではないと思う（藤枝）。

まだ多くの興味深い問題がとりあげられたが、主要な点は以上のようなものである。司会者の熱心な語りかけにより成果が倍加したことを付加えたい。主として女性学の科学性について度々発言し、実態から出発し、個別的に論理化していく方法を示唆したり（米田）、女性の性差・母性についてもアドヴァイスがなされた（池上）。

（文責 野口栄子）